

# 翡翠新聞

# ミニ水族館大奮闘

## 福島の川の美しさ訴え

私たち3班は7月31日、アクアマリンいなわしろカワセミ水族館(安田純館長)を取材した。海や山に恵まれた福島県の自然環境を再現した同水族館は、生き物を愛する飼育員の情熱に支えられ、人気を集めている。淡水館の特色を持つ同水族館は、1号館でカワウソや企画展、2号館で鳥や絶滅危惧種など、興味を持たせるため工夫を凝らしている。山あいのミニ水族館を紹介する。



ひすい新聞由来  
ヒスイはカワセミ科の鳥の総称。青色や暗緑色の美しい羽を持つ。水族館にちなんで、題字を命名。

## 情熱の飼育員三銃士

平澤 桂さん 41歳

飼育員3人の最年長。主に、水生生物の担当。特にゲンゴロウに詳しく、ゲンゴロウ先生とよばれている。今年には希少な水生昆虫の企画展も立案した。いわき市のアクアマリンふくしま勤務時代に、津波被災を経験。(中村侑新)

戸倉 溪太さん 27歳

主に鳥類、魚類担当。水辺の生物の生息環境に大きな影響を与えるウシガエルなどの特定外来生物についても、詳しく説明してくれる。最近カワセミの飼育を始め、張り切っている。イチオシの水生生物はカジカ。(大林萌菜)

永山 駿さん 26歳

カワウソやカワネズミ、魚類担当。川辺にいるこれらの哺乳類の餌を作っている。エサにビタミン剤や整腸剤を混ぜ、動物たちの健康に気を使っている。いわき市のアクアマリンふくしまでは、海獣担当。(佐野光向)

カワセミ水族館は磐梯山のふもとに2015年にオープン。それ以前は、同じ建物で猪苗代淡水魚館が営業していた。館内をリニューアルして、より一層人気が高まった。年間来館者数は約6万8千人。現在約120余種、展示2500点。職員数11人。うち飼育を担当しているのは、チーフリーダー平澤桂さん(41)、技師戸倉溪太さん(27)、同永山駿さん(26)の3人。豊富な自然への知識を裏付けに、同館の盛り上げに奮闘している。

水族館としては、お世辞にも大きな施設とはいえない。ただ、淡水魚館の特長を生かして、ユニークな生物や企画展示を行っている。

取材時に開催していた「The対決 タガメVSゲンゴロウ」は、飼育員手作りの木工模型やコスプレ衣装、生息域がいちじるしく減っているタガメとゲンゴロウを楽しく学べる。

同時に絶滅危惧種や特定外来生物の採取、飼育も許可を得て行っている。微妙なバランスから成り立っている水環境の悪化を気に掛けているのだ。



### わたしたちが編集しました

渡辺 拓夢(一善中)  
渡邊 幸多郎(会津学鳳中)  
中村 侑新(喜多方一小)  
大林 萌菜(若松ザベリオ学園小)  
佐野 光向(日新小)  
豊原 太一(山都小)

後列右から



カワウソのエサ作り(上の写真)  
タガメ対ゲンゴロウのコスプレ(下の写真)



## 大変なカワウソのエサ作り

3班は、カワウソのエサ作りに挑戦した。現在、水族館にはユーラシアカワウソの母親チロル9歳、娘のユキ2歳の2頭を飼育している。エサは1日目馬肉とニジマス、2日目鶏肉とニジマス、3日目ニジマス

のローテーションで回している。目安は1日7匹。私たちはニジマス4〜5匹をさばいた。包丁さばきに慣れていないので、少し苦労した。技師の永山さんは1日2回、エサづくりを行っている。地道な作業の積み重ねに、頭が下がる。カワウソのエサの残りで、カワネズミのエサも作る。ニジマスを細かく切ったものを与えている。タガメのエサは小魚で、エサの残りなどで汚れると、タガメは死んでしまう。自然と同じように水質の悪化に敏感なのだ。(渡辺拓夢、渡邊幸多郎、豊原太一)